



©鳥袋里美

# 柴田元幸『貸出回数が少ない訳書TOP10』を 柴田元幸がアピールする

<b>1位</b> 『アムニジアスコープ』 スティーヴ・エリクソン	<b>2位</b> 『イン・ザ・ペニー・アーケード』 スティーヴン・ミルハウザー
<p>壮大な幻視力の作家エリクソンが、自分を主人公にして、笑ってしまうくらい自虐的な小説を書いた。途方もない想像力と、身につまされる自虐とが合体した怪著にして快著だと思います。</p>	<p>精緻な想像力が身上の作家スティーヴン・ミルハウザー。これまで白水社から拙訳を11冊出してもらいました。つまり、有難いことにそれなりの読者がついていているということ。でもこの第一冊目が出たときはあんまり反応もなくて、もっと届いてほしい……とやきもきした記憶があります。</p>
<b>3位</b> 『インディアナ、インディアナ』 レアード・ハント	<b>4位</b> 『インヴィジブル』 ポール・オースター
<p>これまで自分が訳したなかでもっとも美しい小説のひとつ。レアード・ハントは三冊訳したが、どれも美しい。たとえアメリカの歴史の暗い側面を直視していても。この人の文学的感性の一端は埼玉県熊谷市で英会話教師をしているあいだに培われました。</p>	<p>ポール・オースターは僕が訳している作家のなかでは一番読者が多いと思います。が、なぜかこの本はあまり読まれていないんですね……なんでかなあ。青春小説の秀作『ムーン・パレス』の世界をより暗く、より深く語り直した力作なんです。</p>
<b>5位</b> 『ウェイクフィールド』（柴田訳）／ 『ウェイクフィールドの妻』（青木健史訳） ナサニエル・ホーソーン／エドゥアルド・ベルティ	<b>6位</b> 『Xのアーチ』 スティーヴ・エリクソン
<p>大好きな古典短篇「ウェイクフィールド」を元にしてアルゼンチンの現代作家が中篇を書いたと知って、猛烈に読みたくて当時院生だった青木健史さんにバイト代を出してスペイン語原典を要約してもらったら要約どころか3分の1くらい訳してくれて、やっぱり猛烈に面白そうだったので、こうして元ネタとあわせた形で出版につながりました。</p>	<p>トマス・ジェファソンの生涯をエリクソンの強烈な幻視力で想像し直した力作。これが文庫になったときは嬉しかったなあ。文庫グラ読みの時期が神戸市外大での年末の集中講義とバッチリ重なってしまい、あと〇〇分で郵便局に行かないと間に合わない！という感じであせりましたが何とかなりました。</p>
<b>7位</b> 『エンペラー・オブ・ジ・エア』 イーサン・ケニン	<b>8位</b> 『オラクルナイト』 ポール・オースター
<p>ポール・オースターの『幽霊たち』とほぼ同時期（1989年夏）に出た、僕の小説の翻訳書としては一番最初の本です。優等生的な人間の悲哀とか戸惑いを書いて共感を誘うのがこの書き手のよさ。いまでも時たま、「あの本、好きなんです」と言ってくれる人に出会います。</p>	<p>オースター2003年の作品。作家が生きている世界と書いている世界が錯綜する、とても面白い作り。この前年に書いた、失踪した無声映画のコメディアンを扱った『幻影の書』が交響曲だとすればこちらは弦楽四重奏だ、とオースター氏は言っていました。この本の緊密な作りを言い得て妙。</p>
<b>9位</b> 『鍵のかかった部屋』 ポール・オースター	<b>10位</b> 『家庭の医学』 レベッカ・ブラウン
<p>これもオースター。いわゆる「ニューヨーク三部作」の三冊目で、『ガラスの街』『幽霊たち』と読み進んでこれを読んでいただくと、「私とは何か」という問題を考える上でとても面白いと思います。1989年に翻訳が出た当初は探偵小説として読まれて当惑しましたが（べつに探偵小説を低く見ているわけではありません—この本がそうではないというだけで）、いまではそういう誤解もなくなりました。</p>	<p>レベッカ・ブラウンは日本では、エイズで死んでいく友人たちを介護した体験に基づく『体の贈り物』が広く読まれています。母の最期の日々を、家庭医学事典の用語で各章を始めて綴っているこの本も、医療に携わっている人たちがよく読んでくださったようです。</p>

## 岸本佐知子『貸出回数が少ない訳書TOP10』を岸本佐知子がアピールする

<p><b>1位</b> 『エドウィン・マルハウス』 スティヴン・ミルハウザー</p>	<p><b>2位</b> 『オレンジだけが果物じゃない』 ジャネット・ウィンターソン</p>
<p>自分が手がけた本は一冊残らず「傑作！」と思いながら訳してきましたが、中でも「とにかく大傑作だからだまされたと思って読んで！」と会う人ごとに言わずにいられないのがこの本です。十一歳で夭折した天才作家の生涯を、同じく十一歳の少年が三島由紀夫ばりの濃密な文章でつづった、いわば偽伝記。無垢でも純真でもない、熱病のような子供時代を描き出す文章のアラベスクのような妖しい美しさに、訳しながら何度もうっとりとして天を仰いだものです。</p>	<p>熱狂的なカルト系キリスト教信者の母親に養女としてもらわれた少女ジャネット。母親のスパルタ教育の甲斐あって子供ながらに説教壇に立つまでになりますが、同性と恋に落ちて世界は一変、悪魔の烙印を押されて教会からも家からも追放されてしまいます。実はこれ、なんと作者の体験を元にした半自伝なのですが、いわゆる「毒親」ものとはまるで違う、おとぎ話が寓話のような不思議な読み心地。ひねくれたユーモアに随所で爆笑必至です。そしてなんといってもお母さんのキャラが最高に魅力的なのです。</p>
<p><b>3位</b> 『元気で大きいアメリカの赤ちゃん』 ジュディ・バドニッツ</p>	<p><b>4位</b> 『さくらぼの性は』 ジャネット・ウィンターソン</p>
<p>夢の国アメリカで出産するために、お腹の子を何年も胎内にとどめて密入国を繰り返す女、白人夫婦のあいだになぜか生まれてしまった墨のように真っ黒な子供、作物のように地面からニョキニョキ生える切断された手足…比類ない空想力をもつバドニッツの物語は一見荒唐無稽、でも実は現実世界を鋭く映す鏡なのです。</p>	<p>人は想像力だけでどれだけ遠くまで行けるのだろうか？と考えるとき、いつも頭に浮かぶのがジャネット・ウィンターソンの名前です。清教徒革命前夜の十七世紀ロンドン。象も吹っ飛ばすほどの巨体で怪力の「犬女」は、ある日テムズ川で男の赤ん坊を拾います。物語は親子の魂の冒険を追って、過去と現代、おとぎ話と現実世界の間に自由自在に飛びまわります。この「犬女」、同じ作者の『オレンジだけが果物じゃない』のあの猛烈母の巨大バージョンで、今まで訳してきた小説の中でも一、二を争う魅力的なキャラクターです。</p>
<p><b>5位</b> 『サミュエル・ジョンソンが怒っている』 リディア・デイヴィス</p>	<p><b>6,7位</b> 『サーカスの息子 上・下』 ジョン・アーヴィング</p>
<p>初めてリディア・デイヴィスの本を読んだとき、あまりの面白さにじっと座っていられず、「わー！」などと叫びながらそこらじゅうを走り回ったことを覚えています。それくらい私にとってはツボ直撃ドストライクの作家です。数年前にブッカー賞を受賞した時の新聞の見出しは〈一行作家のし、デイヴィス、ブッカー賞受賞〉。たしかにいくつかの彼女の小説はものすごく短い。この本の表題作も一行です。でも何より彼女の魅力は「小説かくあるべし」という読み手の固定観念をきれいに覆してくれることにあります。長編『話の終わり』も面白いですよ。</p>	<p>『ホテル・ニューハンプシャー』しかり『ガープの世界』しかり、書くもの全部面白くずっしり読みごたえのあるジョン・アーヴィング。その中でもこの作品は、面白さ読みごたえはもちろんだけれど、舞台の大半はインド、登場人物もほぼ全員インド人という点で異色中の異色でしょう。旅のサーカスの虎やライオンの咆哮、コテコテのポリウッド映画の舞台裏、段ボールハウス立ち並ぶ貧民窟と高級カントリークラブの強烈な対比……訳しおわって何年も経った今も、アーヴィングが言葉でつむぎ出したインドのむせかえるような息づかいが、まだ体のどこかに残っているようです。</p>
<p><b>8位</b> 『室温』 ニコルソン・ベイカー</p>	<p><b>9位</b> 『誰かが歌っている』 トム・レオポルド</p>
<p>デビュー作『中二階』で、今までそんなものが文学のテーマになるなんて誰も思っていなかったミシン目や製氷皿や曲がるストローを題材に、素晴らしく優雅で面白い小説を書いたニコルソン・ベイカー。『室温』は彼の長編第二作で、前作に負けず劣らず名作なのにいま一つ知られていないのは、『中二階』みたいに超絶長い脚注がついていないから？いやいやでも、ある意味この本まるまる一冊が我々の日々の生活への注釈だとも言えるのかも。語り手がコンマの美について熱く語るくだりの圧倒的ドライブ感たるや！</p>	<p>売れない役者・サンディ・バヤードが元カノの自殺の原因を探してニューヨークの街をさまようさまをユーモラスかつ切なく描いて「現代の『ライ麦畑』のようだ」と評された『君がそこにいるように』。本作はその続編です。サンディ君、こんどは自分の第二の母親とでもいうべき黒人のお婆さんと、訳あって奇妙な共同生活を営むことになるのですが、その理由というのがー。大統領が変わるたびに何かと問題になるアメリカの保険制度、この本を訳してだいぶ詳しくなりました。</p>
<p><b>10位</b> 『ダンシング・ガールズ』 マーガレット・アトウッド</p>	 <p>岸本佐知子 ©講談社</p>
<p>マーガレット・アトウッドの初期の短編集。書かれたのはもうかれこれ四〇年以上前、『侍女の物語』が書かれるはるか前ですが、今読んでもテーマは少しも古びていない、どころかますます新しい。「キッチン・ドア」は『侍女の物語』のディストピア世界の前触れを思わせるし、移民との接触を描いた「火星から来た男」や「ダンシング・ガールズ」は、分断が深刻化する今こそ読まれるべき作品です。「訓練」や「旅行記者」はホラー作品として一級だし、「ベティ」は作者の子供時代を色濃く反映して、これも忘れがたい名作です。もう書店では手に入らないけれど、図書館で読めるのはありがたいです。</p>	